

# シュライエルマッハーにおける「神学と哲学」(二)

高 森 昭

## 目 次

(承 前)

二、シュライエルマッハーの神学的著作における「神学と哲学」

(a) 神学通論

(b) 信仰論

さきに「シュライエルマッハーにおける『神学と哲学』(一)」において、われわれは研究史をめぐる問題点および神学的諸著作の検討に着手した。<sup>(1)</sup> その際には紙数の関係でシュライエルマッハーの宗教論第一版について叙述したにとどまった。このたびはその継続としてシュライエルマッハーの神学的主要著作を取り上げ、そのなかにおける「神学と哲学」の把握が如何なる姿でなされ展開されているかを考察したいと考える。したがって我々は先ず、神学通論を取り扱うことから始めたいと思う。

## (四) 神学通論

周知のごとくシュライエルマッハーはその神学通論 *Kurze Darstellung des theologischen Studiums, zum Behuf einleitender Vorlesungen* を一八一一年(第一版)および一八三〇年(第二版)の再度にわたり出版している。<sup>(3)</sup> その背景は彼がハレルおよびベルリンの両大学において延一二回に及ぶ神学諸科解題の講義を行っていたことがあげられる。<sup>(3)</sup> このようにシュライエルマッハーはその神学的展開のなかにあって、数多い神学通論の講義をしており、それらを土台として上記の第一版・第二版が刊行されたのである。したがって講義原稿やノート類が未整理にもせよ今日のこざれているならば、神学通論の研究によき参考材料となる筈である。しかしながらH・シヨルツの報告するところによると、ベルリンに保存されている遺稿類の中にそれらは残念ながら見出されないのである。<sup>(4)</sup> 我々にも残された探究の道は、シュライエルマッハー自身が公刊した神学通論のテキストも厳密に扱うことにつきると云わざるを得ない。

この点に関連して我々はここで更めて研究史をめぐるとの問題点を指摘しておく必要がある。すなわちシュライエルマッハーの神学通論は、その信仰論(一八二一〜二二年初版、一八三〇〜三一年第二版)とともに神学的著作の代表と見なされて然るべき位置を占めている。そこにはシュライエルマッハーの次第に円熟して行く神学思想が示されるからに外ならない。しかしながら一九世紀以来の研究史をふりかえる時に、我々は信仰論に関する多くの研究の積み重ねに比較して、明らかに神学通論についてはそれ程には行われなかった印象がぬぐい切れないのである。その反面、ドイツ語以外の領域、たとえば英、仏、スエーデンなどの各国に神学通論の提出した問題をめぐると影響が表われていることは興味ぶかいものがある。<sup>(5)</sup> このような事情を考慮するときに、神学通論の研究がその密度において信

仰論のそれに及ばなかつ原因は疑いもなく、第一版および第二版のテキストの外には充分なる材料を見出すことが出来なかつた点にあると考えざるを得ないのである。そのうえ、文字通り大著としての風格をそなえた信仰論にくらべて、神学通論はその重要な内容にも拘らず、分量としては小さな著作である。神学諸科解題の古典とも云うべきシュライエルマッハーの神学通論は、その研究にあたって思ひのほか困難な課題を強いてきたことを我々は見出すのである。

さて茲で先ず、シュライエルマッハーが神学通論において、「神学と哲学」に関して如何なる発言をなしているかを検討するところから始めたいと思う。

シュライエルマッハーは神学の全領域を、哲学的神学・歴史的神学・実践的神学に大別して叙述するに先立ち、緒論 *Einleitung* をこゝに置く。<sup>(6)</sup> その終りに近く、第二版においては第二一〜二三節に、「神学と哲学」なる標題がつけられているが見出される。<sup>(6)</sup> したがって、この段落においてシュライエルマッハーが述べていることは、我々の注意をひくに値すると思われる。その中から第二三節を引用して見たい。

「二三節 信仰共同体という概念をさらに展開するということは、諸信仰共同体相互がどんなふうにも、どの程度まで相連するかということと、歴史的に存在してきた信仰の団体の本来的なものが、そうした相連にどう関係するかということ、明らかにすることにならなければならない。そしてこのための場所が宗教哲学の中に与えられている。

この、もちろんまだ慣例となっているわけではない、『宗教哲学』という名称で呼びたいと思つている学科は、ちょうど他の学科では、国家の理念や、あるいは芸術の理念との関係でそうなつていようように、教会の理念との関係で、倫理学に関わりを持

これに続いて更に以下の如き記述があることも参考になるであろう。

「第二四節 このような基礎にもとづいて、キリスト教の本質——キリスト教は、この本質によって、その本来の信仰のありかたになる——および、キリスト教共同体の型態を叙述し、同時にこの両者はどのようにに區別され、どのような差違があるのかということ述べるのに必要なすべてのことが、キリスト教神学の一部を構成する。われわれはこれを、哲学的神学、philosophische Theologieとよぶ。……」<sup>(8)</sup>ここに示されるシュライエルマッハーの神学と哲学との関連についての把握は、あとで更めて考察することとしたい。ここでは彼が神学と哲学との関係を意識しつつ哲学的神学の術語を用いた点に注意を喚起するにとどめたいと思う。

我々はさらにシュライエルマッハーが神学と哲学に関して述べている箇所は、上述の緒論にだけ限定されているのではなく、神学通論の全体にわたって散在していることに留意せねばならない。<sup>(9)</sup>その中から幾つか重要なものを取り出して見たい。

「第三二節 キリスト教の固有な本質は、それが単に経験的にとらえられ得るものではないのと同様に、純粹に学的に構成され得るものでもない。したがってそれは、キリスト教の中に歴史的に存在してきたものと、信仰共同体の相違をひき起こしている諸対立との、比較対照によって、批判的にしか規定することができないのである。(第三三節参照)……」<sup>(10)</sup>

「第二二三節 個々の定式の連関を通じて、教義学的行為に、学的な態度を与えようとする、厳密に教育的意図をもった表現 der streng didaktische Ausdruck は、そのときどきの哲学諸科の状況に依存する。……」

第二二四節 教義の弁証的要素はあらゆる哲学的体系に結びつきうる。その体系が、一般的に言ってか、あるいは、キリスト教がまずそれに所属している特殊な形態においてか、いずれにせよ宗教的要素を、自己の主張によって排除したり、否定したりしていなければよいのである。<sup>(11)</sup>

このような多岐にわたるシュライエルマッハーの叙述を読むときに、われわれは当面の課題である神学と哲学との関連を探究することが、一見まことに複雑であるとの印象を持ちやすい。しかし我々は、シュライエルマッハーが神学を、当時の学問体系との関わりの中で、どのように理解していたかを明らかにしたいと考えるものである。シュライエルマッハーが神学教授として活動を開始して以来、神学の諸学問のなかににおける基礎づけに彼は次第に深い関心を抱かざるを得なくなったのである。したがって神学と哲学の関連づけの問題は、正にこのような巨大な問題意識に支えられている事実到我々は注目する必要がある。そのことに気づく時に、一見まことに理解しにくいシュライエルマッハーの発言も、その内容を我々の前に明らかにしてくるに違いないのである。神学通論における簡略な断片的とも見える叙述には、その背後に大きな思想的潮流の裾野が横たわっていることに気づくべきであろう。

われわれは事柄の検討を開始するにあたり、シュライエルマッハーが神学通論の冒頭において、神学を実定的学問 eine positive Wissenschaft として規定している点より出発したいと考える。すなわちシュライエルマッハーによれば、神学はキリスト教会の指導という目的をもち、その内容はひとつの有機的な全体として組織されるというのである。<sup>(12)</sup>シュライエルマッハーが神学を実定的な学問として把握し主張したことは、すこぶる重要な意味をなっている。<sup>(13)</sup> positive Wissenschaft の語はすでに神学通論第一版(一八一一年)において明確に用いられており、第二版には更にそれが展開されている。<sup>(14)</sup>したがって我々は茲でそうしたシュライエルマッハーの意図を探って見たいと考える。

M・レデカーによると、実定的学問とは、「具体的に存在するもの、現実的な歴史的な生を探究し、思弁的ではなく敷衍して述べる」ことを意図するものであると云う。<sup>(14)</sup>ここではたしかに抽象的思弁的な学問全般の理解に対して神学のあり方を明確にせんとするシュライエルマッハーの姿勢が把握されている。正にこのことがシュライエルマッハーの意図であった点には何人も異論がないと思われる。しかしながら課題はそれにつきるものではなく、彼の視野は神学を実定的学問として把握しつつ、当時の学問体系全般における神学の位置を確認する目標をつねに見失うことがなかったのである。<sup>(15)</sup>したがって実定的学問としての神学とは、歴史のなかに展開している具体的なキリスト教に関する学問的探究の意味だけでは云いつくせない内容をもつと言わざるを得ないのである。

われわれの論点に関連して最近の研究成果の中から、ここでH・J・ビルクナーが指摘している問題にふれてみたい。すなわち彼はシュライエルマッハーが一八〇八年に表わした「ドイツの意味における大学に関する随想」において、神・法・医の三学部を「実定的な学部」と呼んでいる事実を強調する。<sup>(16)</sup>これら三者はいずれも学問の理念から導き出されるのではなく、理論や知識の伝統にもとづく實際面の必要に対処する役割りをなう学問を代表している。この意味では知識のための知識によって成立する哲学学部とは異なる課題をもつことになる。ビルクナーは従来の研究においては、このシュライエルマッハーの主張が充分に考慮されていなかったことを批判している。<sup>(17)</sup>

確かにこれまで殆ど顧みられなかったシュライエルマッハーの著作を新材料として指摘したのはビルクナーの貢献として認めることが出来よう。ただ神学を法学・医学とならんで実定的な学問として位置づけたシュライエルマッハーの洞察は、すでに一九世紀における古典的研究書をのこしたW・ペンダーにより間接的ながら指摘されている事実がある限り、必ずしもビルクナーの主張が最初であるとする必要はないと思われる。<sup>(18)</sup>同時にシュライエルマッハーの神

学通論は、その背景にすでに述べた如く当時の学問体系全般に対する理解が存する以上、その初版が発表された一八一一年直前の時期ばかりでなく、シュライエルマッハーの初期における学問概念の形成を全体的に考察する課題も避けられなくなるであろう。<sup>(19)</sup>

さて我々はここで改めてシュライエルマッハーが、神学を実定的な学問として位置づけを行いつつ、さらに神学を哲学的、歴史的、実践的の三部門に大別したことにふれて見たい。<sup>(20)</sup>結論を先取りするならば、ここに示されるシュライエルマッハーの神学体系は、彼の念頭にある学問全般の理解にまこと深く関わっているのである。シュライエルマッハーが神学通論の第一版および第二版発表をした時期には、これと平行して彼の学問体系理解が完成しつつあった。その大綱は先ず形式的論理としての弁証学 *Dialektik* と現実的学問としての物理学 *Physik* および倫理学 *Ethik* の三者より構成されている。<sup>(21)</sup>さらに物理学は自然に関する知識を取り扱うもので、抽象的物理学 *spekulative Physik* と経験的自然学 *empirische Naturkunde* に大別される。同様に理性に関する知識、とりわけ歴史的社会的生についての知識を取り扱う倫理学は、抽象的倫理学 *spekulative Ethik* と経験的歴史学 *empirische Geschichts-kunde* に分けられる。シュライエルマッハーはその前者を批判的部門、後者を技術的部門と呼んでいるのである。<sup>(22)</sup>

この様なシュライエルマッハーによる学問体系の把握は、我々の主題にとって少からぬ意味をもっている。すなわち神学通論において彼が神学を哲学的、歴史的、実践的の三部門から構成される統一体として提唱したときに、上記の学問体系全般に関するシュライエルマッハーの理解は有力な手がかりとなっているのである。何故なら哲学的神学はシュライエルマッハーの説くところによると、抽象的倫理学と批判的部門(宗教哲学)とに関連をもって展開し、

歴史的神学は歴史学に、また実践神学は技術的部門にそれぞれ対応しつつ、しかも神学は実定的学問として統一体をなしているからである。<sup>(22)</sup> 理解を容易にするために図示すれば次の如くなるであろう。

倫理学	批判的部門(宗教哲学)
歴史的哲学	歴史学
実践的哲学	技術的部門
実践的哲学	実践的哲学

我々はシュライエルマッハーがその神学通論において提唱した神学の位置づけに関して、今日に至るまで賛否両論さまざまの形で論議がなされてきたことを知っている。しかし茲で我々は、今世紀始めにH・シヨルツがシュライエルマッハーの神学通論校訂本に附した緒言の中で行った指摘を想起する必要があると思われる。<sup>(23)</sup> すなわち彼はシュライエルマッハーが神学を実定的学問として把握したことは、「合理的にして思弁的な神学の克服を意味するのであり、きわめて重要な画期的な進歩である」と云っている。つづいて「神学は概念の学ではなく対象の学……であるという認識を語り、これを実際に力あるものたらしめたということ、これが方法論の歴史においてシュライエルマッハーのなした記念すべき業績である」と述べている。<sup>(24)</sup>

もちろん我々はこの様なシュライエルマッハーの貢献が、神学通論において完璧かつ円熟した型でのごさされていると主張することは出来ないし、またその必要もないであろう。むしろ神学通論において我々の主題である「神学と哲学」の関わりについて、シュライエルマッハーは両面にまたがる重要な課題提起を行っていると云うべきである。しかもその問題提起は到達した結論を完成されたものとして遺したのではなく、つねに刺戟を新しき問いとして今日ま

で多くの神学的世代に及ばす意味においてである。彼はたしかに一方で神学と哲学の関連づけから出発して、神学の各部門における有機的関係を重視し、神学の全体を必然的な関連性のもとで考察している。他方シュライエルマッハーは神学と哲学との関連が必ずや学問体系全般への理論的考察へと展開することを明らかにしたのである。これら二重の課題がシュライエルマッハーによって鮮明にされた事実こそ、我々がこんにち神学通論にふれるに際して深く考察すべきことであろう。

#### (2) 信仰論

シュライエルマッハーの信仰論 *Der christliche Glaube nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhang dargestellt* は、神学通論と共に彼の神学的著作を代表するばかりでなく、文字通りライフ・ワークと云うにふさわしき内容をそなえた教義学の古典として今日に至るまで記憶されている。信仰論 *Glaubenslehre* の通称によって知られたこの大著を、シュライエルマッハーは一八二一—二二年(第一版)および一八三〇—三二年(第二版)の再度にわたり、それぞれ二巻の著作として公けにしている。<sup>(25)</sup> すでに神学通論の場合に指摘したのと同じく、信仰論をシュライエルマッハーが二度にわたって出版した背景には、彼がハルレとベルリンの両大学において通算一三回に及ぶ講義が考えられて然るべきであろう。<sup>(26)</sup>

しかしながら我々は茲でこれまで研究者に困難を与えてきた或る事態に直面せざるを得なくなる。それは信仰論の成立に不可欠の直接的材料となるべき講義ノートやメモ類を、シュライエルマッハーが一八二一年に第一版を公けにするに際して、すべて整理してしまい今日のごされていないということである。<sup>(27)</sup> シュライエルマッハーは晩年に至る

まで反復して教義学の講義を続けてきたことを思う時に、信仰論第一版に至るまでの神学的展開を概観する材料を持ち得ない事実が、研究のうえに少からぬ制約であるのは否めない。しかも彼自身がハルレ時代からすでにプロテスタント正統主義の教義学者J・A・クエンシュテットおよびJ・ゲルハルトの著作に目を通して、自己の神学体系を構想していたことを、友人ガースにあてた書簡(一八一一年五月一日)に記しているのである。<sup>(28)</sup>

このような点を考慮するときに我々は、シュライエルマッハーがその神学体系の確立をめざして摸索し前進した道を理解する最も着実な方向としては、何よりも信仰論第一版および第二版それ自体によって精密な研究を行うことであらう。それと共にほぼ同じ時期にシュライエルマッハーが書き上げた著作として、神学通論第一版および第二版があることは当然おぼえられて然るべきである。その外にも我々は信仰論の理解を助ける役割りを果たすものとして、シュライエルマッハーの書簡のなかから、F・H・ヤコービにあてた書簡(一八一八年三月三〇日)およびF・リュッケあての回覧書簡二通(いずれも一八二九年)をあけておきたい。<sup>(29)</sup>これらの書簡類は我々の主題である神学と哲学の関係を考察するにあたって、興味ある視点を提供しているからである。すなわちヤコービにあてた書簡においてシュライエルマッハーは、哲学者ヤコービが信仰は感情に関わる事柄で知識で把握する問題ではないと主張していることにふれつつ、感情ではキリスト者、知識では異教徒となる必要はないことを説いている。そこには哲学と教義学とは一つの楕円における二焦点としてとらえるシュライエルマッハーの立場が明瞭に示されている。<sup>(30)</sup>これに比較してリュッケへの回覧書簡においては、まことに対照的なシュライエルマッハーの見解が述べられている。そこでは信仰論はあくまでも哲学的思弁とは独立したものであり、キリスト教信仰経験を叙述することが本来の課題であると説かれているのである。<sup>(31)</sup>したがって茲で我々は神学と哲学との関係をめぐり、シュライエルマッハーの一見まったく異なる見解

に出会うことになる。もちろん、これらの書簡は離れた時期と異なる課題のもとで書かれており、その叙述を簡単に比較することは慎しまねばならない。けれどもこうした謎の様なシュライエルマッハーの言葉が多くの研究者を刺戟して、神学と哲学との関係を究明する意欲をかきたててきたことは、否定できない事実として憶えられるべきであらう。

さてこれまで述べられてきた課題や問題点を念頭におさめつつ、我々はここで信仰論における神学と哲学との関連を探りたいとおもう。信仰論は云うまでもなく膨大な著作である。第一版においては一九〇の、第二版においては一七二のパラグラフから全体が構成されており、いずれも二巻の書物として出版されねばならなかった程の分量を保持している。我々は先ず第一にこの信仰論のなかで、神学と哲学に関してシュライエルマッハーが正面から言及している箇所を検討してみることから始めたい。彼が我々の主題にふれている箇所は、単に神学もしくは哲学のみに関して語っている場合を含めて、決して少ない回数に及んでいいるのは云うまでもない。<sup>(32)</sup>そのなかで神学と哲学との関連を示す代表的な例として、第二版の§一六の補遺にあたる部分を注目すべきであろうと考える。

周知の如くシュライエルマッハーは信仰論第二版において§一より三一までを序論としてまとめている。彼自身の書き込んだ表題によると、その内容は以下のように配列されている。

## §一 明

### 第一章 教義学の説明について §二一九

#### 一、§三一六 教会の概念、倫理学からの補助命題

#### シュライエルマッハーにおける「神学と哲学」(一)(高森)

- 二、§七—一〇 敬虔な共同体一般の相違について、宗教哲学からの補助命題
  - 三、§一一—一四 キリスト教独自の本質にもとづく叙述、弁証学からの補助命題
  - 四、§一五—一九 教義学のキリスト教敬虔との関係について
- 第二章 教義学の方法について §二〇—三二

## §二 緒論

- 一、§二—二六 教義学的資料の選択について
- 二、§二七—三一 教義学の形成について

したがって我々がいま注意を向けている§一六の補遺は、§三より一四に及ぶ三種の補助命題に関する叙述が終ったあとの位置に見出されることを先ず念頭におきたいと考える。さて、§一六はこれに先行する§一五がその概要 *Leitsatz* を「キリスト教の信仰命題とは、キリスト教の敬虔な心情状態の理解を言語で表現したものである」と述べた後に続いている。すなわち§一六では「教義学的諸命題は、叙述的教訓の様式の諸信仰命題であり、これらの命題においては規定の最高可能性が目ざされている」とその概要が提示される。<sup>33)</sup> シュライエルマッハーによれば、信仰命題には詩的・演說的・叙述的教訓的の三種があり、前二者は文学的表現であるが教義学的命題とはなり得ない。明瞭な概念的表現に到達しているものとして叙述的・教訓的形式の信仰命題のみを採用すると云うのである。

茲でやや長文にわたるがシュライエルマッハーが§一六補遺のなかで、我々の主題に関して主張しているところを引用して見たいと思う。彼はその結びの部分において以下のように述べているのである。

「プロテスタント教会は次のような一致した意識を自身の中にいだいている。すなわち、その教義学的命題の特有な形態は、いかなる哲学の形式にも学派にも基つかず、また単なる思弁的興味からも出発していないと云うことである。むしろそれはキリストの純粹かつ誤りなき創設によってのみ得られた直接的意識の充足への関心から出ている。したがってプロテスタント教会は徹頭徹尾、こうした由来によると示し得る命題のみを、自己の教義学的命題とすることが出来るのである。しかしながら我々の教義神学は神学独自の根拠と地盤にかたく立つことについて、哲理がながらく自身の根拠と地盤の上にあるのと同じようには行かぬ場合がある。それはこれら兩種の命題が完璧となり、その結果たとえば同じ命題が哲学においては真理、神学においては虚偽、あるいはその逆という如き奇妙な問題がもはやあり得ないようにならぬ限り起り得る。或る命題が一方には存在するが他の場所には見出せないのではなく、似た響きを持ちながら、しかも相違点が常に前提されねばならぬのである限り、さきの場合には神学が個有の根拠と地盤のうえに立たなくなるのである。しかしながら教義学的命題を思弁的命題の種類にしたがって基礎づけ推論することと努力したり、あるいは思弁的活動の産物と、敬虔なる心情状態を吟味した結果とを、一つの全体に処理することとつとめるならば、我々はここに云う循環からなお非常に離れたところにある。<sup>34)</sup>

以上の引用における最後の文章において、シュライエルマッハーが暗にヘーゲルを批判していることは何人の目にも明らかである。当時ヘーゲルはシュライエルマッハーとともにベルリン大学教授として活動しており、また神学部にもその影響をよく受けた Ph・K・マルハイネッケがいたことを忘れてはならないであろう。<sup>35)</sup> したがってヘーゲルの影響下にあるマルハイネッケに代表される思弁的神学 *spekulative Theologie* との対決は、シュライエルマッハーには避けることの出来ない課題であった。

この様な事情を念頭におきつつ、更めてシュライエルマッハーが神学と哲学の関連について述べるところに注目し

て行きたい。あえて一言で表現するならば、両者の単なる接近ではなく、相違を前提した相互の關係が指向されているように思われる。この関連で我々はさきに引用した第二版§一六補遺は、すでに第一版のこれに相應する個所において、殆ど同じ内容でしるされている点も併せて記憶されるべきである。すなわち第一版§二の末尾に見出される文章がそれである。<sup>(86)</sup>このように第一版および第二版に同趣旨の文章が収録されている事実は、信仰論の成立より考えても、おそらくシュライエルマッハー自身が講義の中において同じ主張をくりかえし行っていたことを反映していると思われる。なお第一版§二の結びに見られる文章が、第二版一六補遺では除かれているが、そこではむしろシュライエルマッハーの意図を端的に示した言葉が見られるのは興味ぶかい。

「……………しかし概念と命題をとまなうすべての教義学的思考は、根源的に敬虔なる心情態状の分化せる吟味に外ならない。そのことは我々が教義学と呼ぶ全てが敬虔なる性向との関連であらわれるという事に由来しているのである。これに対して哲理上の神および人間の神に対する關係にかんする命題は全く異なる性格のものである。それは有限なる存在とその諸変化に関する思索との関連で成り立つからである」<sup>(87)</sup>

信仰論における神学と哲学との関連について、第二に我々が取り上げなければならぬのは、補助命題 *Lehrsätze* の解明であろう。周知のごとくシュライエルマッハーは信仰論第二版において三種の補助命題を提起している。すなわち「教会の概念、倫理学からの補助命題」(§三一六)、「敬虔な共同体一般の相違について、宗教哲学からの補助命題」(§七一〇)、「キリスト教独自の本質にもとづく叙述、弁証学からの補助命題」(§一一一四)がそれである。ちなみに補助命題の用語は第二版において、シュライエルマッハーが始めて表題として書きこんだものであり第一版には見出されない。しかしながら今日あらためて両者を比較するときに、概要 *Lehrsätze* の配列順から見ても

でば構想は第一版刊行の時期に確立していたことが充分に伺われるのである。<sup>(88)</sup>

我々はここでシュライエルマッハーが上記の補助命題によって意図したものが何であったかを考察してみたい。信仰論第二版とはほぼ同時期にまとめられた神学通論第二版において、シュライエルマッハーが哲学的神学を倫理学および宗教哲学との関連において構想したことはすでに述べた。あわせて彼が哲学的神学を区分して、弁証学 *Apologetik* と論争学 *Polemik* にわけていたことを想起したい。すなわち前者はその方向を外に向けているのに対し、後者は内を向いており共に哲学的神学の部分を構成しているのである。<sup>(89)</sup>この哲学論神学が神学的学科であることは、シュライエルマッハー自身が明白に指摘していたことであつた。<sup>(90)</sup>したがって研究史において繰り返し主張されてきた、補助命題それ自体がシュライエルマッハー神学の哲学への解消もしくは妥協を意味するとの見解は、いささか性急にすぎるものと云わざるを得ない。少くともシュライエルマッハーの意図にそくして見る限り、補助命題の三種を彼が信仰論の序論において提起しているのは、その信仰論全体の構造につながる意義をになうものである。次に少くその点に立ち入って見たいと考える。

シュライエルマッハーは信仰論第二版の冒頭§二において、始めて補助命題を提唱するに際して次の如き趣旨の説明を行っている。<sup>(91)</sup>教義学の果すべき課題を最も良く説明するために、我々はまずキリスト教会の概念にふれることから始めなければならない。その筋道として先ず、教会の一般的概念は倫理学より取られた補助命題によって明らかにせられる。それは教会の基盤にある敬虔なる生いとなみを他の集団におけるそれとの関連で叙述する。それらの内容の歴史的類型にしたがって、キリスト教会の特殊性を明らかにすることが為される。この課題を果すものは第二の宗教哲学よりの補助命題である。すなわち、そこでは人間の敬虔を表現している諸宗教信仰集団の形態が批判的に叙



述されて、単に学問的に把握されるのでも、又たんなる経験を通して理解されるのでもないキリスト教会の特殊性が明らかになれる。この様な宗教哲学からの結論が満足すべき展開に到達して、第三の弁証論よりの補助命題が叙述されることとなる。ここでは他宗教の信仰集団に対するキリスト教会のもつ関係が、キリスト教の本質を考察することによって明らかにされるのである。<sup>(45)</sup>

以上のような叙述を通してシュライエルマッハーが信仰論の序論に補助命題をおいた意図を我々は察知し得るのである。ここで我々は彼自身が信仰論を書き始めるにあたって、その第二版においては教義学の「説明、Erklärung」に先ず手をつけており、教義学とは何であるかに関して多くの争点があることを認めているのを更めて思い出す必要がある。<sup>(46)</sup> 事実、補助命題を提示しそれらを総括して叙述した上述の§二において、シュライエルマッハーはこうした企てによって、「最初の何歩かのところですでに、教義学には何とまた多くの相違した説明と理解のあることを示す機会」としたかったと述べているのである。<sup>(47)</sup> はからずも茲で我々は、信仰論をめぐる重要な争点のひとつである神学と哲学の関連に直面させられた思いである。しかしながら、いま補助命題の面からのみ我々の結論を急ぐことは避けなければならぬ。少くとも信仰論の序論につづく本論の叙述に見られるシュライエルマッハー神学の構造を知ることなしには、到底われわれの主題について全容をかいまみることは困難である。したがって我々は次の問題にひとまず移らねばならない。

シュライエルマッハーの信仰論はその構成の巧みさにおいて、しばしば建築の傑作にたとえられてきた。<sup>(48)</sup> 信仰論第二版は序論につづいて§三より本論が開始されるが、敬虔自己意識それ自体を扱う第一部と、敬虔自己意識の罪と恩寵との対立による展開を取り扱う第二部より成っている。特にこの第二部は§六二より一六九までをしめており、

信仰論全体のうちで最も大きな部分を構成している。この部分が更に罪および恩寵の意識の対立から規定される二つの側面に分化されていることは、その背景として少くともハイデルベルク信仰問答を考えさせるのに充分であろう。<sup>(49)</sup> 加えてシュライエルマッハーはこの第二部において、彼自身が「教義学全体の基礎テキスト」と呼んだヨハネ福音書一章一四節にもとづく内容の展開をしていることを忘れてはならない。<sup>(50)</sup>

ここに述べた三種の意識とならんでシュライエルマッハーは更にいまひとつの三種の命題を提唱している。すなわち、彼は教義学的命題はキリスト教的敬虔自己意識を、言語によって表現したものであると考える。<sup>(51)</sup> このキリスト教的敬虔自己意識は、同時に自己を規定する他者の意識と結合することとなる。その結果、「神の属性と行為様式の概念」、および「世界の状態についての表現」との命題を生み出すのである。かくして「人間の生の状態の記述」とあわせて、信仰論が提示する全ての命題は、これら三形態において並立するのである。<sup>(52)</sup> いまシュライエルマッハーが構想した信仰論を図式化して示してみたい。<sup>(53)</sup>

信 仰 論 (第二版)

序 論 §一一三

I 敬虔自己意識それ自体 §三一―六一

序 §三一―三五

II 敬虔自己意識対立による規定 §六二―一六九

序 §六二―六四

A 罪の意識

§六五―八五 序 §六五

B 恩寵の意識

§八六―一六九 序 八六―九〇

シュライエルマッハーにおける「神学と哲学」(二) (高森)

- |  |                              |  |
|--|------------------------------|--|
| 1、人間の敬虔自己意識<br>§三六一四九                    | 1、人間の状態としての罪<br>§六六一七四       | 1、恩寵の意識としてのキリスト<br>者の状態 §九一一一二                 |
| (創造)<br>保持                               | (原行罪)                        | (キリスト)<br>救済                                   |
| 2、対応する神の属性<br>§五〇一五六<br>(永遠、遍在<br>全能、全知) | 2、対応する世界の状態<br>§七五—七八<br>(悪) | 2、対応する世界の状態<br>§一一三—一六三<br>(聖霊、恩寵の手段<br>教会、終末) |
| 3、対応する世界の状態<br>§五七—六一<br>(原始状態)          | 3、対応する神の属性<br>§七九—八五<br>(義聖) | 3、対応する神の属性<br>§一六四—一六九<br>(知恵)                 |

## 結 論 §一七〇—一七二(三位一体)

我々は信仰論全体に展開されたシュライエルマッハーの構想を茲で唐突に論評することはひかえたい。それに先立って我々の主題である神学と哲学の関連づけに視野を限定する時に、信仰論の構造にはシュライエルマッハーの意図したものが明らかに見られる点を指摘するにとどめたいと思う。シュライエルマッハーが教義学的素材を整理して芸術的なまでに整然と分類し配列するにあたって、彼がスコラおよびプロテスタント正統主義における伝統的教義学の体系を用いたことは周知の事実である。云うまでもなく、伝統的教義学の体系は、旧新約聖書の救済史を基礎として、創造・罪過・キリスト・救済・聖霊・恩寵の手段、教会、終末という配列をもっている。さらにその冒頭に神論が独立しておかれるに至ったことも西欧における神学の歴史にその跡をとどめている。かくして神より始まりキリストを

へて終末にいたる教義学体系の確立にあたって、その冒頭における神論は、正に神学と哲学の折衝を重要な内容としていたことを、我々はここにち更めて想起する必要がある。したがって、こうした伝統的教義学体系の整理配列を新たに構想することによって、彼が信仰論において目標としたところが明白になっている。さきに述べた信仰論の内容図示に見られる通り、神論は教義学の冒頭にはおかれず、むしろ信仰論の全体にかかわるものとなっている。すなわち神が人間および世界のあらゆる現実全体に関わることをシュライエルマッハーは示さんとしているのである。伝統的教義学において神論は神学と哲学の折衝する場所であったとすれば、シュライエルマッハーの場合は正にその課題を、信仰論の全体を通して受けとることを構想したのである。

信仰論における神学と哲学の関連を取り扱った章を終えるにあたり、ひとこと我々の探究結果をふりかえって述べておきたい。もともと神学と哲学の関連をさぐるに際して、シュライエルマッハーの場合、神学が哲学を、哲学が神学を如何に把握しているかが、あわせて考察されるべきである。したがって、信仰論における神学と哲学の考察につづいて、我々はシュライエルマッハーの哲学的著作、とりわけ弁証論 *Dialektik* の研究を考慮する必要がある。信仰論にかんする限り、シュライエルマッハーは神学と哲学を相互に相違を前提した動的な関連として把握しようとしている<sup>(2)</sup>。それが哲学的著作その他にどのように示され、如何なる総合的結論へと我々を導くかを次の機会に明らかにして見たいと思う。



種があるので参照されたい。シュライエルマッハ、三枝訳、信仰論序説、長崎書店、一九四一年、およびシュライエルマッハー、今井訳、キリスト教信仰(抄)(現代キリスト教叢書 1、白水社、一九七四年、二二—一九六頁に収録)

26 GL<sup>2</sup>. Bd. I.S. XV—XXI の M. レデカーが記すところに従うて以下の通りである。

ハルレ	一八〇四～五年	冬学期	講義題	Dogmatik
	一八〇五～六年	冬学期	講義題	christliche Glaubenslehre
ヘーリン	一八一一年	夏学期	講義	Dogmatische Theologie nebst vorausgeschickten philosophischen Untersuchungen über die christliche Religion
	一八二二～二三年	冬学期	講義題	Dogmatik
	一八一六年	夏学期	同	右
	一八一八年	夏学期	同	右
	一八一八～一九年	冬学期	同	右
	一八二〇～二一年	冬学期	同	右
	一八二二年	夏学期	同	右
	一八三三～二四年	冬学期	講義題	christliche Glaubenslehre nach dem Buche : Der christliche Glaube

一八二五年 夏学期 講義題 Dogmatik  
 一八二七～二八年 冬学期 講義題 christliche Glaubenslehre dem Buche : Der christliche Glaube  
 一八三〇年 夏学期 講義題 Dogmatische Theologie nach dem Buche : Der christliche Glaube

またシュライエルマッハーは一八一一年より二二年までは夏学期に週五時間、一八二三年からは週一〇時間の講義を行っていたとされている。

27 この事実は註4に言及した、現在ケルミンに保存されている遺稿類に関する資料に基づいても確認する事が可能である。なや GL<sup>2</sup>, Bd. I, S. XXI を参照されたい。

28 Schleierm. als Mensch. Sein Wirken. Familien- und Freundesbrief, 1804 bis 1834, hrsg. von H. Meisner, Gotta, 1923, S. 134 を参照されたい。

29 ヤローウクの書簡については M. Cordes, Der Brief Schleiermachers an Jacobi, Ein Beitrag zu seiner Entstehung und Überlieferung, ZThk 68 (1971), S. 195—212 の末尾 (S. 208—211) に校訂原文が収録されている。またリムマケウの回覧書簡は Schleiermachers Sendkreise über seine Glaubenslehre an Lücke, neu hrsg. von

H. Mulert, Gießen, 1908 年の引用を本論文では正しく引用。なや Schlieermacher Auswahl. Mit einem Nachwort von Karl Barth, hrsg. von H. Boli, (München/Hamburg, 1968, S. 120—175) にも収録されているので便利である。

30 ところわけ以下の文章を参照されたい。

「……………したがって私の哲学と私の教義学とは正しく互いに矛盾すべきものではありませんが、その故にこそ両者にはこれで終りだという事がないのです。そして私が考えることの出来る限り、それらはいつも相互に規定し合ってきたし、また常に一そう接近してきたのです」前掲書 S. 209 参照。

31 たとえば以下の文章を参照されたい。

「しかしながら私自身は、私のキリスト教信仰が知識もしくは哲学——何か特定の何か、あるいは他の何かであるにせよ——から引き出されているなどと告白できることは一度たりともあり得ない。」(リムマケウへの第二回覧書簡、前掲書 S. 38f.) 「したがって私に『キリシヤ人たちが贈物をもたらす時にも彼等を警戒する』態度をつらぬかせて頂きたい。また私が自身の哲学的素人芸を……………信仰論の内容には何の影響も許さないとする意図に忠実であり続けたことに満足させて欲しいと願います。」(リムマケウへの第二回覧書簡、前掲書 S. 66)

32 例えば第二版に限ってみるならば以下の箇所をあげ得る

シュライエルマッハーにおける「神学と哲学」I (高森)

(GL<sup>2</sup>, Bd. II, S. 572—580 の索引による。数字はペラグラノナやウイゲルやホルトが Th の略称で Schleiermachers handschriftliche Anmerkungen zum ersten Theil der Glaubenslehre, hrsg. von C. Thönes, Berlin, 1873 年の上記の Bl.<sup>2</sup> 欄外に収録されているものを示す)。

神学 (Theologie)	一〇補遺	一三補遺	一六補遺
教義学 (Dogmatik)	四〇・一	一六〇・三	その他
教義学 (dogmatisch)	一五	一六	一七
	一九	二〇	二二
	二七・四	二八	二八・三
八補遺 (Th)			その他
哲学 (Philosophie)	哲理 (Weltweisheit)		
	八補遺 (Th)	一〇補遺	一一・三
	一六補遺	二八・一以下	
	三三・二	四三・一	五〇・一
	一〇〇・三	一一五・八	
形而上学 (Metaphysik)	三〇・二以下	五〇・一	
思弁 (Spekulation)	四・四 (Th)	五〇・二	
	五六・二 (Th)	九〇・二	
	一一四・二	一二六・二	
	一六七・一		

- 33 §一五および一六の概要は、ともに、現代キリスト教叢書 1、白水社、一九七四年、一五九頁より引用した。
- 34 GL<sup>2</sup> Bd. I. S. 112 参照。
- 35 マントゥーネッケ Ph. K. Marheineke (1780—1846) は一八二一年、ハイデルベルク大学よりヘルリン大学にちかえられた。多くの著書のうち Grundlehren der christlichen Dogmatik als Wissenschaft (初版一八一九年、第二版一八二〇年) が重要である。なお H.-J. Birkner, Theologie und Philosophie, S. 37 を比較せよ。
- 36 GL<sup>1</sup> Bd. I. S. 8—12 参照。
- 37 GL<sup>1</sup> Bd. I. S. 11f. 46 引用。
- 38 GL<sup>2</sup> Bd. II. S. 498—563 に収録された Leitsätze der 1. und 2. Auflage, Synopse によると、思想内容が以下の如く相互に対応している(数字はパラグラフを示す)。  
 第一版(一八二二—二三年) 第二版(一八三〇—三二年)  
 八 三  
 九 四  
 一〇—一一 五  
 一二 六  
 一三 六  
 一四 七  
 一五 八

- 一六 九
- 一七 一〇
- 一八 一一
- 一九 一〇補遺
- 二〇 一三
- 二一 一四
- 二二 一一
- 39 神学通論 二五—四三頁参照。  
 なお補助命題に関する研究として D. Offermann, Schleiermachers Einleitung in die Glaubenslehre, Eine Untersuchung der "Leitsätze" Berlin, 1969 を参照せよ。
- 40 たとえば神学通論第三八節を参照せよ。「哲学的神学は神学学科であるので、その形式は、教会指導に対する関係によって規定されなければならない。」(加藤訳 神学通論 二八頁より引用)
- 41 GL<sup>2</sup> Bd. I. S. 10—14 の叙述を参照せよ。とりわけ §二・二の段落、上掲書 S. 12f. は重要である。
- 42 ここに極めて簡略化した形でのふたところは、シュライエルトマンが信仰論第二版、§二・二に説明したところによっている。もちろん後続の §三—一四において、更に詳細に

- わたる叙述がなされていることは言うまでもない。ただ信仰論においてシュライエルトマンが三種の補助命題をまとめて総括的に示した箇所は §二・二のみである。しかしながら、ここで叙述された内容が非常に簡単であるところから、しばしば彼自身が誤解をふくめた批判を蒙ってきたことは事実である。その意味で今日もなお研究者の間で、§二・二においてシュライエルトマンが行った倫理学、宗教哲学、弁証学の定義について疑義が存在することをおぼしめを得ぬ事態と思われる。この点に関連して H.-J. Birkner, Theologie und Philosophie, S. 34 Anm. 33 を参考にせよ。
- 43 シュライエルトマンが第一版においては、教義学の定義から叙述を開始していることは興味ある。これに関連して GL<sup>1</sup> Bd. I. S. 1—8 を比較せよ。「教義神学はキリスト教的教会集団において特定の時期に妥当する教理の組織にかんする学問である。」(§一の標題)
- 44 GL<sup>2</sup> Bd. I. S. 14 (§二・三) より引用。
- 45 たとえば、「……………すなわち、シュライエルトマンハの信仰論が、その構成という点で、その長ひ、あるいは斜めに横切る接合の仕方、それぞれの部分の割合のとれた姿、左右の対照などによって、しばしば美的な感懐を感じさせるようなことのない人間は、私は俗物だと考える。……………」(H・テューリケ、加藤訳、現代に信仰は可能か、ヨルダンシュライエルトマンにおける「神学と哲学」I (高森)

- 社、一九七〇年、二二六頁より引用)
- 46 ちなみに信仰論第七版を校訂した M・レデカーは、シュライエルトマンが信仰論において特に改革派教会の諸信条を念頭においていた点にわれ注意をうながしている。GL<sup>2</sup> Bd. II. S. 579f. Anmerkung 参照。また M. Stiewe, Das Unionsverständnis Friedrich Schleiermachers. Der Protestantismus als Konfession in der Glaubenslehre, Witten, 1969, S. 100—153 をあわせて参照せよ。
- 47 リュッケンの第二回覽書簡にある以下の文章を参照せよ。「私は読者に対して出来る限りこのように明白にせねばならぬと願ったことがありました。それはヨハネ福音書一章一四節の句が教義学全体の基礎テキストであるという事です。」(前掲書 S. 34)。
- 48 信仰論第二版の 一五を参照せよ。GL<sup>2</sup> Bd. I. S. 105—107。
- 49 信仰論第二版の三〇および三二を参照せよ。GL<sup>2</sup> Bd. I. S. 163—197。
- 50 この図を複製したものは G. Ebeling, Schleiermachers Lehre von den Göttlichen Eigenschaften, in: Wort und Glaube, Bd. II, Tübingen, 1969, S. 330f. に収録された Schema der Glaubenslehre および Schema der göttlichen Eigenschaften を参考にせよ。

16 ヲバウツル V. Weymann, Glaube als Lebensvollzug und der Lebensbezug des Denkens. Eine Untersuchung zur Glaubenslehre Friedrich Schleiermachers, Göttingen, 1977. ヲベツ S. 207—245. 註四以下は兼題「説小冊」の「ノット」に於ける「ノット」の語句の註を以て「ノット」の場合、原書中の「ノット」の語句を以て「ノット」に改む。別を以て「ノット」の語句を以て「ノット」に改む。

#### 徳神文庫

同書に於ける「ノット」の語句の註を以て「ノット」の語句を以て「ノット」の語句を以て「ノット」に改む。別を以て「ノット」の語句を以て「ノット」に改む。

#### ノット・ノット

Kurze Darstellung des theologischen Studiums zum Behuf einleitender Vorlesungen, Kritische Ausgabe hrsg. von H. Scholz (1910), Darmstadt, 1961<sup>4</sup> (Nachdruck). (KD ヲ整理)

「徳神文庫」徳神文庫 一六六二冊。

Der christliche Glaube nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhang dargestellt von Dr. Friedrich Schleiermacher, Berlin, 1821—22 (GL<sup>1</sup> ヲ整理) Der christliche Glaube nach den Grundsätzen der ewan-

gelischen Kirche im Zusammenhang dargestellt von Friedrich Schleiermacher, 7. Auflage, auf Grund der 2. Auflage und kritischer Prüfung des Textes neu hrsg. und mit Einleitung, Erläuterungen und Register versehen von

M. Redeker, 2 Bde., Berlin, 1960. (GL<sup>2</sup> ヲ整理) 三校「説小冊」の註を以て「ノット」に改む。今井「ノット」の註を以て「ノット」に改む。

Schleiermachers Sendschreiben über seine Glaubenslehre an Lücke, neu hrsg. von H. Mulert, Gießen, 1908.

M. Cordes, Der Brief Schleiermachers an Jacobi. Ein Beitrag zur seiner Entstehung und Überlieferung, ZThK 68 (1971), S. 195—212.

Schleiermachers Werke, hrsg. von O. Braun & J. Bauer, 4 Bde., Leipzig, 1927—28<sup>2</sup> (Nachdruck, Aalen, 1967).

Schleiermacher Auswahl. Mit einem Nachwort von Karl Barth, hrsg. von H. Boli, München/Hamburg, 1968.

Dialektik, hrsg. von Odebrecht, Leipzig, 1942 (Nachdruck, Darmstadt, 1967).

Schleiermacher als Mensch. Sein Wirken. Familien- und Freundesbrief. 1804 bis 1834, hrsg. von H. Meisner, Göttingen, 1923.

Aus Schleiermachers Leben. in Briefen, hrsg. von L.

Jonas & W. Ditthey, 4 Bde., Berlin, 1860—63 (Nachdruck, 1974).

#### 徳神文庫

A. Faure, Über die 'Idee eines Kirchenfürsten' in Schleiermachers Darstellung des theologischen Studiums, EvTh 3 (1936), S. 384—398.

F. Flückiger, Philosophie und Theologie bei Schleiermacher, Zürich, 1947.

H. G. Fritzsch, Theologie als Wissenschaft. Über den systematischen Unterschied zwischen Theologie und Religionswissenschaft unter besonderer Berücksichtigung der enzyklopädischen Konzeption Schleiermachers, Diss. Berlin, 1953.

E. Witzsche, Die Theologie in Schleiermachers System der Wissenschaften. Diss. Köln, 1953.

E. Hirsch, Schleiermachers Philosophie und Theologie in ihrer Reizeit, in: Geschichte der neuern evangelischen Theologie, Bd. V, Gütersloh, 1960<sup>2</sup>, S. 281—364, bes. S. 348—357.

E. Schott, Erwägungen zu Schleiermachers Programm einer philosophischen Theologie, ThLZ 88 (1963), Sp.

321—336.

H.-J. Birkner, Schleiermachers christliche Sittenlehre im Zusammenhang seines philosophisch-theologischen Systems, Berlin, 1964, bes. S. 30—64.

M. Redeker, Friedrich Schleiermacher. Leben und Werk (1768 bis 1834) Berlin, 1968.

R. Stalder, Grundlinien der Theologie Schleiermachers, Wiesbaden, 1969, bes. S. 46—127.

G. Ebeling, Erwägungen zu einer evangelischen Fundamentalthologie, ZThK 67 (1970), S. 479—524.

W. Pannenberg, Wissenschaftstheorie und Theologie, Frankfurt am Main, 1973, bes. S. 249—255.

F. Weber, Schleiermachers Wissenschaftsbegriff. Eine Studie aufgrund seiner frühesten Anhandlungen, Gütersloh, 1973.

H.-J. Birkner, Theologie und Philosophie. Einführung in Problem der Schleiermacher-Interpretation, München, 1974, bes. S. 25—32.

E. Herms, Herkunft, Entfaltung und erste Gestalt des Systems der Wissenschaften bei Schleiermacher, Gütersloh, 1974.

E. Herms, Die Ethik beim späten Schleiermacher, ZThK

- 73 (1976), S. 471—523.  
 聖書翻譯家
- W. Bender, Schleiermachers Theologie nach ihrem philosophischen Grundlegen dargestellt, 2. Teil, Nördlingen, 1878, bes. S. 351—545.
- C. Clemens, Schleiermachers Glaubenslehre in ihrer Bedeutung für Vergangenheit und Zukunft, Glessen, 1905.
- H. Muirer, Die Aufnahme der Glaubenslehre Schleiermachers, ZThK 18 (1908), S. 107—139; Nachlese, ZThK 19 (1909), S. 243—246.
- H. Scholz, Christentum und Wissenschaft in Schleiermachers Glaubenslehre, Ein Beitrag zum Verständnis der Schleiermacherschen Theologie, Leipzig, 1911<sup>2</sup>.
- F. Flückiger, Philosophie und Theologie bei Schleiermacher, Zürich, 1947.
- H.-J. Birkner, Beobachtungen zu Schleiermachers Programm der Dogmatik, NZStH 5 (1963), S. 119—131.
- W. Trillhaas, Der Mittelpunkt der Glaubenslehre Schleiermachers, NZStH 10 (1968), S. 289—309.
- W. Brandt, Der Heilige Geist und die Kirche bei Schleiermacher, Zürich, 1968.
- G. Ebeling, Schleiermachers Lehre von den göttlichen Eigenschaften, ZThK 65 (1968), S. 456—494, in: Wort und Glaube Bd. II, Tübingen, 1969, S. 305—342.
- D. Offermann, Schleiermachers Einleitung in die Glaubenslehre. Eine Untersuchung der "Lehrsätze", Berlin, 1969.
- M. Stiewe, Das Unionsverständnis Friedrich Schleiermachers. Der Protestantismus als Konfession in der Glaubenslehre, Witten, 1969.
- F. Beifer, Schleiermachers Lehre von Gott dargestellt nach seinen Reden und seiner Glaubenslehre, Göttingen, 1970.
- G. Ebeling, Schlechthiniges Abhängigkeitsgefühl als Gottesbewußtsein, Mutuum Colloquium, Dortmund, 1972, S. 89ff. in: Wort und Glaube Bd. III, Tübingen, 1975, S. 116—136.
- G. Ebeling, Beobachtungen zu Schleiermachers Wirklichkeitsverständnis, Neues Testament und christliche Existenz, Tübingen, 1973, S. 163ff. in: Wort und Glaube Bd. III, Tübingen, 1975, S. 96—115.
- H.-J. Birkner, Theologie und Philosophie. Einführung in Probleme der Schleiermacher-Interpretation, München, 1974.
- M. Trowitzsch, Zeit zur Ewigkeit. Beiträge zum Zeitverständnis in der "Glaubenslehre" Schleiermachers, München, 1976.
- E. Herrns, Die Ethik des Wissens beim späten Schleiermacher, ZThK 73 (1976), S. 471—523.
- H. Peiter, Theologische Ideologiekritik. Die praktische Konsequenzen der Rechtfertigungslehre bei Schleiermacher, Göttingen, 1977.
- V. Weymann, Glaube als Lebensvollzug und der Lebensbezug des Denkens. Eine Untersuchung zur Glaubenslehre Friedrich Schleiermachers, Göttingen, 1977.
- 日本語文献として次の論文をあげた。  
 佐藤敏夫、シュライエホルマッハー神学における経験と歴史、神学二二（一九六一年一〇月）、一八一—五九頁。